
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 加州《かしゅう》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 石川|郡《ごおり》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) うすいも [# 「うすいも」に傍点] のある顔を

[]：アクセント分解された欧文をかこむ
(例) 主な [role^] をつとめる
アクセント分解についての詳細は下記URLを参照してください
http://aozora.gr.jp/accent_separation.html

—

加州《かしゅう》石川|郡《ごおり》金沢城の城主、前田|斉広《なりひろ》は、参観中《さんきんちゅう》、江戸城の本丸《ほんまる》へ登城《とじょう》する毎に、必ず愛用の煙管《きせる》を持って行った。当時有名な煙管商、住吉屋七兵衛《すみよしやしちべえ》の手に成った、金無垢地《きんむくじ》に、剣梅鉢《けんうめばち》の紋《もん》ぢらしと云う、数寄《すき》を凝《こ》らした煙管《きせる》である。

前田家は、幕府の制度によると、五世《ごせ》、加賀守綱紀《かがのかみつなのり》以来、大廊下詰《おおろうかづめ》で、席次は、世々|尾紀水三家《びきすいさんけ》の次を占めている。勿論、裕福な事も、当時の大小名の中で、肩を比べる者は、ほとんど、一人もない。だから、その当主たる斉広は、金無垢《きんむく》の煙管を持つと云う事は、寧《むし》ろ身分相当の装飾品を持つのに過ぎないのである。

しかし斉広は、その煙管を持っている事を甚《はなは》だ、得意に感じていた。もっとも断って置くが、彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味でも、愛翫《あいがん》したからではない。彼はそう云う煙管を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越な所以《ゆえん》を悦んだのである。つまり、彼は、加州百万石が金無垢の煙管になって、どこへでも、持って行けるのが、得意だった と云っても差支《さしつか》えない。

そう云う次第だから、斉広は、登城している間中、殆どその煙管を離した事がない。人と話しをしている時は勿論、独りでいる時でも、彼はそれを懐中から出して、鷹揚《おうよう》に口に啣《くわ》えながら、長崎煙草《ながさきたばこ》が何かの匂いの高い煙りを、必ず悠々とくゆらせている。

勿論この得意な心もちも、煙管なり、それによって代表される百万石なりを、人に見せびらかすほど、増長慢《ぞうちょうまん》な性質のものではなかったかも知れない。が、彼自身が見せびらかさないまでも、殿中《でんちゅう》の注意は、明かに、その煙管に集注されている観があった。そうして、その集注されていると云う事を意識するのが斉広にとっては、かなり愉快的な感じを与えた。 現に彼には、同席の大名に、あまりお煙管が見事だからちょいと拝見させて頂きたいと、云われた後《あと》では、のみなれた煙草の煙までがいつもより、一層快く、舌を刺戟《しげき》するような気さえ、したのである。

二

斉広《なりひろ》の持っている、金無垢《きんむく》の煙管《きせる》に、眼を駭《おどろ》かした連中の中で、最もそれを話題にする事を好んだのは所謂《いわゆる》、お坊主《ぼうず》の階級である。彼等はよるとさわると、鼻をつき合せて、この「加賀の煙管」を材料に得意の饒舌《じょうぜつ》を闘わせた。

「さすがは、大名道具だて。」

「同じ道具でも、ああ云う物は、つぶしが利《き》きやす。」

「質《しち》に置いたら、何両貸す事かの。」

「貴公じゃあるまいし、誰が質になんぞ、置くものか。」

ざっと、こんな調子である。

するとある日、彼等の五六人が、円《まる》い頭をならべて、一服やりながら、例の如く煙管の噂《うわさ》をしていると、そこへ、偶然、御数寄屋坊主《おすきやぼうず》の河内山宗俊《こうちやまそうしゅん》が、やって来た。後年《こうねん》「天保六歌仙《てんぽうろっかせん》」の中の、主な〔role^〕をつとめるになった男である。

「ふんまた煙管か。」

河内山は、一座の坊主を、尻眼にかけて、空嘯《そらうそぶ》いた。

「彫《ほり》と云い、地金《じがね》と云い、見事な物さ。銀の煙管さえ持たぬこちとらには見るも眼の毒……」

調子にのって弁じていた了哲《りょうてつ》と云う坊主が、ふと気がついて見ると、宗俊は、いつの間にか彼の煙管入れをひきよせて、その中から煙草をつめては、悠然と煙を輪にふいている。

「おい、おい、それは貴公の煙草入れじゃないぜ。」

「いいって事よ。」

宗俊は、了哲の方を見むきもせずに、また煙草をつめた。そうして、それを吸ってしまうと、生《なま》あくびを一つしながら、煙草入れをそこへ抛《ほう》り出して、

「ええ、悪い煙草だ。煙管ごのみが、聞いてあきれるぜ。」

了哲は慌てて、煙草入れをしまった。

「なに、金無垢《きんむく》の煙管なら、それでも、ちょいとめようと云うものさ。」

「ふんまた煙管か。」と繰返して、「そんなに金無垢が有難けりや何故お煙管拝領と出かけねえんだ。」

「お煙管拝領？」

「そうよ。」

さすがに、了哲も相手の傍若無人《ぼうじゃくぶじん》なのにあきたらしい。

「いくらお前、わしが欲ばりでも、……せめて、銀でもあれば、格別さ。……とにかく、金無垢だぜ。あの煙管は。」

「知れた事よ。金無垢ならばこそ、貰うんだ。真鍮《しんちゅう》の駄六《だろく》を拝領に出る奴がどこにある。」

「だが、そいつは少し恐れだて。」

了哲はきれいに剃《そ》った頭を一つたたいて恐縮したような身ぶりをした。

「手前が貰わざ、己《おれ》が貰う。いいか、あとで羨《うらやま》しがらなよ。」

河内山はこう云って、煙管をはたきながら肩をゆすって、せせら笑った。

三

それから間もなくの事である。

齊広《なりひろ》がいつものように、殿中《でんちゅう》の一間で煙草をくゆらせていると、西王母《せいおうぼ》を描いた金襴《きんぷすま》が、静に開《あ》いて、黒手《くろで》の黄八丈《きはちじょう》に、黒の紋附《もんつき》の羽織を着た坊主が一人、恭《うやうや》しく、彼の前へ這って出た。顔を上げずにいるので、誰だかまだわからない。齊広は、何か用が出来たのかと思ったので、煙管《きせる》をはたきながら、寛濶《かんかつ》に声をかけた。

「何用じゃ。」

「ええ、宗俊《そうしゅん》御願がございまする。」

河内山《こうちやま》はこう云って、ちょいと言葉を切った。それから、次の語を云っている中に、だんだん頭《かしら》を上げて、しまいには、じっと齊広の顔を見つめ出した。こう云う種類の人間のみが持つて居る、一種の愛嬌《あいきょう》をたたえながら、蛇が物を狙うような眼で見つめたのである。

「別儀でもございせんが、その御手許にございまする御煙管を、手前、拝領致しとうございまする。」

齊広は思わず手にしていた煙管を見た。その視線が、煙管へ落ちたのと、河内山が追いかけるように、語を次いだのが、ほとんど同時である。

「如何《いかが》でございましょう。拝領仰せつけられましょうか。」

宗俊の語の中《うち》にあるものは懇請の情ばかりではない、お坊主《ぼうず》と云う階級があらゆる大名に対して持っている、威嚇《いかく》の意も籠《こも》っている。煩雑な典故《てんこ》を尚《とうと》んだ、殿中では、天下の侯伯も、お坊主の指導に従わなければならない。齊広には一方にそう云う弱みがあった。それからまた一方には体面上|卑劣《ひりん》の名を取りたくないと言う心もちがある。しかも、彼にとって金無垢の煙管そのものは、決して得難い品ではない。この二つの動機が一つになった時、彼の手は自《おのずか》ら、その煙管を、河内山の前へさし出した。

「おお、とらず。持つてまいれ。」

「有難うございます。」

宗俊は、金無垢の煙管をうけとると、恭しく押頂《おしいただ》いて、そこそこ、また西王母の襖《ふすま》の向うへ、ひき下った。すると、ひき下る拍子に、後《うしろ》から袖を引いたものがある。ふりかえると、そこには、了哲《りょうてつ》が、うすいも〔#「うすいも」に傍点〕のある顔をにやつかせながら、彼の掌《てのひら》の上にある金無垢の煙管をもの欲しそうに、指さしていた。

「こう、見や。」

河内山は、小声でこう云って、煙管の雁首《がんくび》を、了哲の鼻の先へ、持って行った。

「とうとう、せしめたな。」

「だから、云わねえ事じゃねえ。今になって、羨《うらや》ましがったって、後《あと》の祭だ。」

「今度は、私《わし》も拝領と出かけよう。」

「へん、御勝手《ごかって》になせえました。」

河内山は、ちょっと煙管の目方をひいて見て、それから、襖ごしに斉広の方を一瞥《いちべつ》しながら、また、肩をゆすってせせら笑った。

四

では、煙管《きせる》をまき上げられた斉広《なりひろ》の方は、不快に感じたかと云うと、必しもそうではない。それは、彼が、下城《げじょう》をする際に、いつになく機嫌《きげん》のよさそうな顔をしているので、供《とも》の侍たちが、不思議に思ったと云うのでも、知れるのである。

彼は、むしろ、宗俊に煙管をやった事に、一種の満足を感じていた。あるいは、煙管を持っている時よりも、その満足の度は、大きかったかも知れない。しかしこれは至極当然な話である。何故と云えば、彼が煙管を得意にするのは、前にも断《ことわ》ったように、煙管そのものを、愛翫《あいがん》するからではない。実は、煙管の形をしている、百万石が自慢なのである。だから、彼のこの虚栄心は、金無垢の煙管を愛用する事によって、満足させられると同じように、その煙管を惜しげもなく、他人にくれてやる事によって、更によく満足させられる訳ではあるまいか。たまたまそれを河内山にやる際に、幾分外部の事情に、強《し》いられたような所があったにしても、彼の満足が、そのために、少しでも損ぜられる事などはないのである。

そこで、斉広は、本郷《ほんごう》の屋敷へ帰ると、近習《きんじゅ》の侍に向って、愉快そうにこう云った。
。「煙管は宗俊の坊主にとらせたぞよ。」

五

これを聞いた家中《かちゅう》の者は、斉広《なりひろ》の宏量《こうりょう》なのに驚いた。しかし御用部屋《ごようべや》の山崎 | 勘左衛門《かんざえもん》、御納戸掛《おなんどがかり》の岩田 | 内蔵之助《くら のすけ》、御勝手方《おかってがた》の上木《かみき》九郎右衛門　この三人の役人だけは思わず、眉《まゆ》をひそめたのである。

加州一藩の経済にとっては、勿論、金無垢の煙管《きせる》一本の費用くらいは、何でもない。が、賀節《がせつ》朔望《さくぼう》二十八日の登城《とじょう》の度に、必ず、それを一本ずつ、坊主たちにとられるとなると、容易ならない支出である。あるいは、そのために運上《うんじょう》を増して煙管の入目《いりめ》を償《つぐな》うような事が、起らないとも限らない。そうなっては、大変である　三人の忠義の侍は、皆云い合せたように、それを未然に惧《おそ》れた。

そこで、彼等は、早速評議を開いて、善後策を講じる事になった。善後策と云っても、勿論一つしかない。

それは、煙管の地金《じがね》を全然変更して、坊主共の欲しがらないようなものにする事である。が、その地金を何にするか云う問題になると、岩田と上木とで、互に意見を異にした。

岩田は君公の体面上銀より卑《いや》しい金属を用いるのは、異《い》なものであると云う。上木はまた、すでに坊主共の欲心を防ごうと云うのなら、真鍮《しんちゅう》を用いるのに越した事はない。今更体面を、顧慮する如きは、姑息《こそく》の見《けん》であると云う。　二人は、各々、自説を固守して、極力 | 論駁《ろんぱく》を試みた。

すると、老功な山崎が、両説とも、至極道理がある。が、まず、一応、銀を用いて見て、それでも坊主共が欲しがるようだったら、その後、真鍮を用いても、遅くはあるまい。と云う折衷説《せっちゅうせつ》を持出した。これには二人とも、勿論、異議のあるべき筈がない。そこで評議は、とうとう、また、住吉屋《すみよしや》七兵衛に命じて銀の煙管を造らせる事に、一決した。

六

齊広《なりひろ》は、爾来《じらい》登城する毎に、銀の煙管《きせる》を持って行った。やはり、剣梅鉢《けんうめばち》の紋ぢらしの、精巧を極めた煙管である。

彼が新調の煙管を、以前ほど、得意にしていない事は勿論である。第一人と話しをしている時でさえ滅多に手にとらない。手にとっても直《すぐ》にまたしまってしまう。同じ長崎煙草が、金無垢の煙管でのんだ時ほど、うまくないからである。が、煙管の地金《じがね》の変った事は独り齊広の上に影響したばかりではない。三人の忠臣が予想した通り、坊主共《ぼうずども》の上にも、影響した。しかし、この影響は結果において彼等の予想を、全然裏切ってしまう事に、なったのである。何故と云えば坊主共は、金が銀に変わったのを見ると、今まで金無垢なるが故に、遠慮をしていた連中さえ、先を争って御煙管拝領に出かけて来た。しかも、金無垢の煙管にさえ、愛着《あいじゃく》のなかった齊広が、銀の煙管をくれてやるのに、未練《みれん》のあるべき筈はない。彼は、請われるままに、惜し気もなく煙管を投げてやった。しまいには、登城した時に、煙管をやるのか、煙管をやるために登城するのか、彼自身にも判別が出来なくなった。少くともなったくらいである。

これを聞いた、山崎、岩田、上木の三人は、また、愁眉《しゅうび》をあつめて評議した。こうなっては、いよいよ上木の献策通り、真鍮の煙管を造らせるよりほかに、仕方がない。そこで、また、例の如く、命が住吉屋七兵衛へ下《くだ》ろうとした。丁度、その時である。一人の近習《きんじゅ》が齊広の旨を伝えに、彼等の所へやって来た。

「御前《ごぜん》は銀の煙管を持つと坊主共の所望がうるさい。以来従前通り、金の煙管に致せと仰せられまする。」

三人は、啞然《あぜん》として、為す所を知らなかった。

七

河内山宗俊《こうちやまそうしゅん》は、ほかの坊主共が先を争って、齊広《なりひろ》の銀の煙管《きせる》を貰いにゆくのを、傍痛《かたわらいた》く眺めていた。ことに、了哲《りょうてつ》が、八朔《はっさく》の登城の節か何かに、一本貰って、嬉しがっていた時なぞは、持前の癩高《かんだか》い声で、頭から「莫迦《ばか》め」をあびせかけたほどである。彼は決して銀の煙管が欲しくない訳ではない。が、ほかの坊主共と一しょになって、同じ煙管の跡を、追いかけて歩くには、余りに、「金箔《きんぱく》」がつきすぎている。その高慢と欲との闘《せめ》ぎあうのに苦しめられた彼は、今に見ろ、己《おれ》が鼻を明かしてやるから。と云う気で、何気ない体《てい》を装いながら、油断なく、齊広の煙管へ眼をつけていた。

すると、ある日、彼は、齊広が、以前のような金無垢の煙管で悠々と煙草をくゆらしているのに、気がついた。が、坊主仲間では誰も貰いに行くものがないらしい。そこで彼は折から通りかかった了哲をよびとめて、そつと願《あご》で齊広の方を教えながら囁《ささや》いた。

「また金無垢になったじゃねえか。」

了哲はそれを聞くと、呆《あき》れたような顔をして、宗俊を見た。

「いい加減に欲ばるがいい。銀の煙管でさえ、あの通りねだられるのに、何で金無垢の煙管なんぞ持って来るものか。」

「じゃあれは何だ。」

「真鍮だろうさ。」

宗俊は肩をゆすった。四方《あたり》を憚《はばか》って笑い声を立てなかったのである。

「よし、真鍮なら、真鍮にして置け。己《おれ》が拝領と出てやるから。」

「どうして、また、金だと云うのだい。」了哲の自信は、怪しくなったらしい。

「手前たちの思惑《おもわく》は先様《さきさま》御承知でよ。真鍮と見せて、実は金無垢を持って来たんだ。第一、百万石の殿様が、真鍮の煙管を黙って持っている筈がねえ。」

宗俊は、口早にこう云って、独り、齊広の方へやって行った。あつけにとられた了哲を、例の西王母《せいおうぼ》の金襖の前に残しながら。

それから、半時《はんとし》ばかり後《のち》である。了哲は、また畳廊下《たたみろうか》で、河内山に出くわした。

「どうしたい、宗俊、一件は。」

「一件は何だ。」

了哲は、下唇をつき出しながら、じろじろ宗俊の顔を見て、

「とげなさんな。煙管の事さ。」

「うん、煙管か。煙管なら、手前にくれてやらあ。」

河内山は懷から、黄いろく光る煙管を出したかと思うと、了哲の顔へ抛《ほう》りつけて、足早に行ってしまった。

了哲は、ぶつけられた所をさすりながら、こぼしこぼし、下に落ちた煙管を手にとった。見ると剣梅鉢《けんうめばち》の紋ぢらしの数寄《すき》を凝《こ》らした、真鍮の煙管である。彼は忌々《いまいま》しそう

に、それを、また、畳の上へ抛り出すと、白足袋《しろたび》の足を上げて、この上を大仰《おおぎょう》に踏みつける真似をした。……

八

それ以来、坊主が斉広《なりひろ》の煙管《きせる》をねだる事は、ぱったり跡を絶ってしまった。何故と云えば、斉広の持っている煙管は真鍮だと云う事が、宗俊と了哲とによって、一同に証明されたからである。

そこで、一時、真鍮の煙管を金と偽《いつわ》って、斉広を欺《あざむ》いた三人の忠臣は、評議の末再び、住吉屋七兵衛に命じて、金無垢の煙管を調製させた。前に河内山にとられたのと寸分もちがわない、剣梅鉢の紋ざらしの煙管である。　　斉広はこの煙管を持って内心、坊主共にねだられる事を予期しながら、揚々として登城した。

すると、誰一人、拝領を願いに出るものがない。前に同じ金無垢の煙管を二本までねだった河内山さえ、じろりと一瞥を与えたなり、小腰をかがめて行ってしまった。同席の大名は、勿論拝見したいとも何とも云わずに、黙っている。斉広には、それが不思議であった。

いや、不思議だったばかりではない。しまいには、それが何となく不安になった。そこで彼はまた河内山の来かかったのを見た時に、今度はこっちから声をかけた。

「宗俊、煙管をとらそうか。」

「いえ、難有《ありがと》うございますが、手前はもう、以前に頂いて居りまする。」

宗俊は、斉広が翻弄《ほんろう》するとでも思ったのであろう。丁寧な語の中《うち》に、鋭い口気《こうき》を籠めてこう云った。

斉広はこれを聞くと、不快そうに、顔をくもらせた。長崎煙草の味も今では、口にあわない。急に今まで感じていた、百万石の勢力が、この金無垢の煙管の先から出る煙の如く、多愛《たわい》なく消えてゆくような気がしたからである。……

古老《ころう》の伝える所によると、前田家では斉広以後、斉泰《なりやす》も、慶寧《よしやす》も、煙管は皆真鍮のものを用了たそうである、事によると、これは、金無垢の煙管に懲《こ》りた斉広が、子孫に遺誠《いまい》でも垂れた結果かも知れない。

[# 地から 1 字上げ] (大正五年十月)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986 (昭和61) 年9月24日第1刷発行

1995 (平成7) 年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。